

2016年3月6日川越教会

深い思いやり

加藤 享

[聖書]ヨハネによる福音書16章25～33節

「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。あなたが何でもご存じて、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

[序]使徒たちを育てる

イエス・キリストは、これらと思う人を12人呼び寄せて、使徒と呼び、自分のそばに置いて訓練し、宣教に派遣し、悪霊を追い出す権能を持たせました。彼らはガリラヤ湖の漁師たちだったり、税務署の小役人だったり、ごく普通の庶民だったようです。しかし神の子キリストの傍近くで毎日生活することによって、キリストの人格にふれ、その働きを目の当たりに経験する、実に恵まれた信仰訓練を受けました。そこで程なくペトロは「あなたこそ生ける神の子です」と信仰告白できるようになりました(マタイ16:16)。

うらやましい限りです。私たちも2000年の時間を飛び越えて、主イエスの身近で、信仰訓練を受けたら、どんなに素晴らしいことでしょうか。

[1]逃げ散ってしまう弟子たち

しかし、その後の弟子たちの姿をよく見て行きますと、これほど身近に暮らしながら、素晴らしい救い主イエス・キリストを、はっきりと理解出来なかったことがわかります。先ず、ペトロがしっかりと信仰告白をすると、主はご自分がどのように死ぬかを予告されました。

「必ずエルサレムに行って、長老・祭司長・律法学者たちから**多くの苦しみを**受けて殺され、三日目に**復活すること**になっている」(マタイ 16:21)。ペトロはすぐさま反論しました。「主よ、**とんでもないことです**。そんなことがあってはなりません」。そして主から「**サタン、引き下がれ**。あなたはわたしの邪魔をする者」と厳しく叱られています。

更に、神の子としての主の公の生涯が終わりに近づき、十字架の死が間近に迫ってきても、弟子たちは、それが**メシアの栄光を現す時の到来**だからと受け取って、誰が主の王座の右・左に着くのかと、**出世争い**を始めています(マタイ20:20～、マルコ 10:35～、ルカ 22:24～)。すると主はペトロに「今夜のうちに三度、**わたしを知らないと言う**」と予告されました。

勿論ペトロも他の弟子たちも、「たとえご一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどは**決して申しません**」と答えています。しかしペトロは、捕えられた主を案じて大祭司の中庭に入り込みましたが、とがめられると、「**その人を知らない**」と言って、我が身を守ってしまいました(マタイ26:69～、マルコ14:66～、ルカ22:56～、ヨハネ18:15～)。

今日の聖書の箇所をご覧ください。主は弟子たちに向かって、「あなたがたが散らされて**自分の家に帰ってしまい**、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。」と語っておられますね。そうです。最後の晩餐の後で、ゲッセマネの園で祈っておられる主イエスが逮捕されると、「弟子たちは皆、**イエスを見捨てて逃げてしまった**」のでした(マタイ 26:56、マルコ 16:50)。なんと不甲斐ない使徒たちでしょうか。

主は貧しい者、苦しむ者、嘆き悲しんでいる者、虐げられている弱い者を、**優しい愛**をもって寄り添い、惜しみなく**救いの手**を差し伸べて下さいました。お腹を空かせている人たちをそのまま家に帰らせずに、満腹させて下さいました。**病人や障害者**を癒されたばかりでなく、**死んだ者**をも蘇らせて、悲しみにくれている家族に戻して下さいました。隔ての無い豊かな愛そのもののご生涯を送られたのです。

特に選ばれた使徒なのに、主を守らずに逃げてしまうなどという**背信行為**をどうしてしたのでしょうか。**人間失格**です。恥ずかしくて生きていけないのではないのでしょうか。自分に絶望して**自殺**するか、自己嫌悪に陥って**廃人**になってしまうのではないのでしょうか。

しかし使徒たちは、主を敵に売り渡したユダが自殺した以外は、皆、使徒として**立ち直り**、各自の**使命を全う**したのでした。一体これはどうしたことでしょうか。

[2]よく理解できなかった真理

第一に、神の子救い主が、十字架の死を遂げることによって、救いの業を成し遂げるという神の真理が、私たち人間の理解を超えた真理で、なかなか分からなかったからだと思います。一番最後に使徒に任じられたパウロがフィリピ教会への手紙でこのように説明しています。

「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした。このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました。こうして、天上のもの、地上のもの、地下のものがすべて、イエスの御名にひざまずき、すべての舌が、「イエス・キリストは主である」と公に宣べて、父である神をたたえるのです。」(2:6～11)

いと高き神が身を低くして人になり、しかも最低の十字架の死を引き受けてくださることなど、先ず考えられないことです。どんなにひどい罪を犯した極悪人をも救い上げる贖いの死を遂げて、天上に戻られた。最も高いお方が最も低くなられた。それ故に、天上のものも地上のものも、地下のものもすべてから、主とほめたたえられるのだということです。徹底的に身を低くすることで、すべての者を救う救いを全うされたのです。十字架の死は、まさにその救いの御業なのでした。これは「人の心に思い浮かびもしなかったこと」(Iコリント 2:9)です。ですから、使徒たちも最後まで理解出来なかったのです。

第二に身を低くするということが、私たち人間には至難の業だからでしょう。使徒たちの最後まで重大関心事は、12人の順位、出世競争でした。ヨハネ福音書13章の最後の晩餐の記事をごらんください。主イエスが弟子たち全員の足を洗っておられます。

食事に招かれた時には、家で全身を洗ってから出向きます。しかし道は舗装されていませんから、サンダル履きの足は汚れます。その家の僕の中の一番卑しい僕が、客の足を洗いました。しかしこの時は弟子たち皆の足が汚れたままでした。きっと主と弟子たちだけの個人的な会食だったからでしょう。日本でしたら、後輩が先輩の足を洗います。でもこの時は、序列を競う心の争いが渦巻いていたので、卑しい僕役を自分から出た者が居なかったようです。それにしても主の足を洗う者さえいなかったとは、あきれてしまいます。私たちの出世欲は、それほど根深いものなのですね。

そこで主はさっと上着を脱ぎ、手ぬぐいを腰に巻きつけ、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、手ぬぐいでふき始められたのでした。ペトロは恐縮して「わたしの足など、決して洗わないでください」と断りました。当然でしょう。では他の弟子たちは黙って主にされるままだったのでしょうか。私はこう思います。主は先ずペトロの足を洗おうとなさったけれども、彼が強く辞退したので、その隣の弟子から始めた。彼らは主とペトロとのやり取りを見て、これは断れないと観念して洗って頂いた。そして最後に再びペトロの所に戻ったので、主は再度洗おうとされたのではないのでしょうか。

彼はなおも固辞しました。「もしわたしが洗わないなら、あなたはわたしと何のかかわりもないことになる」「主よ、足だけでなく手も頭も」。いかにもペトロらしい受け答えですね。こうして皆の足を洗い終わると、上着を着て席に戻り、おっしゃいました。「主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」(13:14)。

上着を脱ぐという動詞は「捨てる」という意味も持っています。主の上着を脱ぎ捨てて、一番卑しい奴隷になり切って、主は弟子たちの体の中で一番低くて、直ぐに汚れてしまう足を、身をかがめて丁寧に洗って下さったのでした。そして全ての人の罪の汚れを、ご自分の血で洗い清める十字架の死を弟子たちに示されたのでした。

天地万物の主なる神さまが、私たちを罪の滅びから救うために、私たちと同じ人間の姿をとり、一緒に生きて下さり、一番卑しい十字架刑について、最低の罪人と一体になって、贖いの死を遂げて下さる——この救いの真理を、弟子たちに理解させようと考えられたのでした。しかしこの真理は、弟子たちには最後までよく理解出来なかったのです。

[3]不変の愛と信頼

さて今日の聖書の箇所、ヨハネ福音書16章に入ります。6節に「わたしがこのことを話したので、あなたがたの心は悲しみで満たされている」。また17節以下では「『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言うておられるのは、何のことだろう。」「『しばらくすると』と言うておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。」

そこで主は28節で「わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く」とおっしゃいました。そこで弟子たちは「今わかりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます」(30節)。しかし神のもとに、どのようにして帰っていかれるのか、その時にどのような事が起こるのかについては、

未だ考えが及んでいません。そこでこのように、お語りになりました。

「今ようやく、信じるようになったのか。だが、あなたがたが**散らされて**自分の家に帰ってしまい、**わたしをひとりきりにする時**が来る。いや、既に来ている」。先程も申しましたように、ペトロも他の弟子たちも皆「主よ、ご一緒なら、牢に入っても**死んでも良い覚悟**しております」(ルカ 22:33)と誓っています。それなのにいざとなったら、皆逃げ散ってしまったのです。何と情けない弟子たちでしょうか。

それを見通しておられながら、主はおっしゃいました。「しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ。これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって**平和を得る**ためである。」(32～33 節)。これは、情けない弟子たちへの**皮肉**や**批判**の言葉ではありません。「大丈夫、父なる神が何時いかなる時も私と共に居て下さるのだから。自分たちの**不甲斐なさを責めなくてもよい**のだよ。心の平和を保ちなさい」。弟子たちの弱さをそのまま受け入れて、立ち直って、使徒としての任務を果たしていくように励ましておられる言葉なのですね。

13章1節、弟子たちの足を洗われた晩餐の冒頭で、ヨハネは「イエスはこの世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく**愛し抜かれた**」と記しています。新改訳聖書では「その愛を残るところなく示された」と訳しています。そして 12 人の仲間の序列争いに捉われている弟子たちに、一番卑しい奴隷になって彼らの足を洗い、十字架の死を引き受ける**ご自分の愛**を、弟子たちに伝えようとしたのでした。主はその愛を、十字架を前にして逃げ散ってしまった弟子たちにも、変わる**ことなく持ち続ける**ことを、約束なさったのです。そしてこの愛ゆえに**変わらぬ主の**主の**信頼**を示されて、弟子たちは立ち直ることが出来たのです。

[結]素晴らしい恵み

主は、弟子たちが逃げ散っても、共に居て下さる父なる神と一体になって、捕えられていき、十字架にかけられ、6時間にわたる死の苦しみを耐え抜いて、「**成し遂げられた**」と語りつつ息を引き取られました(ヨハネ 19:30)。

そして父なる神は、三日目にこの**主を復活**させて、弟子たちの許に再び送られました。主はユダヤ教徒を恐れて家に閉じこもっていた弟子たちの**信仰を復活**させ、世界の全ての人に福音を宣べ伝える証し人へと**立ち直らせて**下さいました。弟子たちに対する**主の愛と信頼**は変わることがなかったのです。まさに「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」とのお言葉通りでした。このようなイエス・キリストが私たちの救い主なのです。なんと**素晴らしい恵み**で

しょうか！

祈ります：主なる神さま。あのイエスさまと生活を共にしながら、信仰を養われたペトロたちがうらやましく思います。それでも弟子たちは、最後に逃げ散ってしまいました。人間の弱さ、罪深さを痛感させられます。それでも弟子たちに対する主の愛と信頼は変わりませんでした。そしてその愛と信頼の故に、弟子たちは、立ち直り、十字架の福音を全世界に宣べ伝える者になりました。

どうぞ私たちの信仰をも、忍耐をもって育て導いて下さいますように、お願いします。どうか、主に習って、足を洗う者にして下さい。十字架の主イエス・キリストの御名によって、お祈りします。アーメン